

ここが楽園

Nagasaki
Slow Life

1

ながさき田舎暮らし

【新コーナー】「ここが楽園」ながさき田舎暮らしは、長崎の魅力に惹かれて、長崎県に移り住んで田舎暮らしを実践されている皆さんをご紹介します。

金子邸
長崎市
(琴海尾戸町)

好きなことを好きなときに 好きなだけできる それが田舎暮らしの魅力

移住先は、大村湾を望む絶景の地

目の前に広がる大村湾の波静かで穏やかな風景。ここは、長崎市琴海尾戸町にある金子数栄さん、君子さん夫妻のお宅である。東京で編集の仕事をしていた数栄さんは、若い頃から山登りが好きで、四十歳を過ぎてからトライアスロンを始めたというスポーツマンだ。いつかは田舎暮らしをしたいと考えていたが、その思いが次第に募り、五十一歳で退職。夫婦でこの地に移り住んでもう十四年になる。

「移住するなら温暖な気候の九州がいいと思い、いくつかの候補地をあたってみたのですが、山と海に囲まれたこの地を訪れたとき、もうここしかないと確信しました。起伏に富んだ地形はトライアスロンの練習にもぴったりですからね。」と数栄さんは語る。

自然と向き合う、手作りの生活

現在、金子さん夫妻は、半農半漁の生活を営んでいる。農業は主に君子さんの担当で、米や麦、そばのほか、季節の野菜や果実、ハーブなどを栽培している。漁業は、移住後に漁協の組合員となった数栄さんの仕事。大村湾に漁船を繰り出し、冬はモズクやウニ、ナマコ、春から秋にかけては刺し網漁でアジやイカなどを水揚げしている。食べる物はほぼ自給自足でまかなっており、二人で食べきれない分は近くの直売所で販売。君子さんが作るズッキーニなどの外国野菜や果実のジャムは人気を呼んでいるそうだ。

大村湾を望む自宅の庭には木製の椅子やテーブル、露天風呂などがあるが、それらはすべて数栄さんの手作りだという。

「都会で暮らしていたときは、大工仕事なんてやったことありませんでした。しかし、ここに来てからは近所の皆さんから材木をいただくので、いろんなものを作るようになりました。」と目を細める。

「近所の農家の皆さんは野菜の作り方を親切に教えてくださいますし、道行く子どもたちも元気に挨拶をしてくれます。ここには、都会にはない温もりがあります。移住して間もない頃、地域の皆さんの優しさにふれたときは本当に感動しました。」と君子さんはしみじみと語る。

お二人にご自宅を案内していただいた。広い居間の中央にある囲炉裏ももちろん数栄さんの手作り。壁に飾られたツルウメモドキのリースは君子さんのお手製である。この温もりに満ちた空間は、いつの頃からか近所の皆さんが集い、話に花を咲かせる社交場となった。

居間から奥の部屋に進むと、そこには落ち着いた雰囲気ジャズバーがあった。カウンターの棚には友人

たちのキープボトルがずらりと並ぶ。ここは、数栄さんが仲間とグラスを傾けながら語り合う大人の隠れ家なのだ。

田舎暮らしの極意は「自ら地域にとけ込むこと」

数栄さんに田舎暮らしについて聞いてみた。「田舎暮らしに大切なことは、都会の暮らしをそのまま持ち込むのではなく、自分から地域の中に飛び込み、地元の人々とのコミュニケーションを深めること。何も知らない都会からの移住者にとって、みんな田舎暮らしの先輩であり先生です。心を開いておつきあいすれば何でも教えてくれますよ。」

この地に移住してきた平成六年、大村湾を望む庭先に植えたセンダンの若木は、今や見上げるほどの大木に成長した。その木陰で金子さん夫妻は声を揃えるようにこう話してく

れた。「好きなことを好きなときに、好きなだけできる。それが田舎暮らしの魅力ですね。」

初夏の風を受けて心地よい葉音を響かせるセンダンの木が、この地で育んできた十四年間の豊かな暮らしを物語っているように思えた。



この地に移住したときに植えたセンダンの木陰で語り合う金子さんご夫妻
木製の椅子やテーブルは数栄さんの手作り



露天風呂からは大村湾の穏やかな風景が望める



自慢のジャズバーでグラスを傾けながら友人と語り合う



大村湾に船を繰り出す数栄さん



この日の畑仕事はイモの苗植え



君子さんの手作りジャムは直売所でも人気



畑にはかわいいブラックベリーも